

ワクチンで防げる病気はワクチンで防ぎましょう。

2011.03.15

ワクチンというとなみなさんはどんなことを考えますか？水ぼうそうやおたふくかぜはまだまだ罹ったほうがいいのではというふうに考えていませんか？

子供の命は最初はとても弱い灯火です。昭和40年代後半までは、生まれたばかりで細菌が感染して亡くなったりや大きくなって麻しんの感染で命を落したりするお子さんが多数いました。

昭和36年からポリオのワクチンが始まりポリオがほとんどなくなり、昭和50年代からは麻しんのワクチンが始まり、麻しんで命を落とすお子さんがとても少なくなりました。2000年を最後に麻しんでの1歳前のお子さんの死亡はなくなりましたので、麻しんのワクチンが子どもの命にもたらした功績はとても大きいものがあります。

2008年12月からインフルエンザ菌b型に対するワクチンが始まり、乳児の髄膜炎での死亡数は2000年の12名から2009年の6名へと半減しています。

また、昨年は水痘にかかって命を落したという報告がありましたし、おたふくかぜによって片方あるいは両方の耳が聞こえなくなる事例も報告されていますので、お金がかかる、罹ったほうがいいのではという躊躇で、子供が一生背負う障碍はとても大きなものでもありません。

B型肝炎に対するワクチンはいままで母子感染予防を目的に行われてきました。母子感染以外では慢性化したり、がん化するようなことはあまりないものと今までは考えられていましたが、最近では大きくなってからの感染でも慢性化しがん化するタイプが知られるようになりました。このタイプに対応するためにも、小さなうちからB型肝炎に対するワクチンをする必要があるものと言われていています。

ワクチンは接種することで子供には多くのメリットがあります。稀にお子さんが亡くなる前にワクチンをしていた場合が認められますが、世界中でワクチンが原因で死亡したと因果関係が認められた例はほとんどありません。